

永井隆則

絵画における真実

近代化社会に対するセザンヌの実践の意味

何故、何のために
セザンヌは描き続けたのか？
画家の存在に関わる
究極の問いに答える！



絵画における真実
近代化社会に対するセザンヌの実践の意味

A5 判 (210×148mm)
上製・化粧箱入り
本文：848 ページ
カラー口絵：32 ページ
定価 22,000 円 (本体 20,000 円＋税)
2022 年 3 月 31 日刊行
ISBN978-4-88303-545-8

著者略歴

永井隆則 [ながい・たかのり]

1956年生。京都工芸繊維大学准教授。修士（京都大学大学院文学研究科、1980）。Diplôme d'études approfondies（歴史と文明 [美術史]、フランス共和国、プロヴァンス大学、1984）／博士（文学）（京都大学、2006）。ポール・セザンヌ協会会員。著書に『越境する造形——近代の美術とデザインの十字路』（編著）、晃洋書房、2003年／『モダン・アート論再考——制作の論理から』（単著）、思文閣出版、2004年／『セザンヌ受容の研究』（単著）、中央公論美術出版、2007年／『フランス近代美術史の現在——ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』（編著）、三元社、2007年／『デザインの力』（編著）、晃洋書房、2010年／『もっと知りたいセザンヌ』（単著）、東京美術、2012年／『方法と探求——フランス近現代美術史を解剖する』（編著）、晃洋書房、2014年／『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』（編著）、三元社、2016年／『セザンヌ——近代絵画の父、とは何か？』（編著）三元社、2019年／『ピカソと人類の美術』（大高保二郎との共編）、三元社、2020年、他。

セザンヌには美という観念はなかった。あるのは
真実という観念だけだった。

（エミール・ベルナール、1907 年 10 月 1 日）

L' idée de beauté n' était pas en lui, il n' avait que celle de vérité.
(Émile Bernard, Souvenirs sur Paul Cézanne et lettres inédites,
Mercure de France, Vol. 69, No. 247, 1^{er} octobre 1907, p. 395.)

発行
三元社

東京都文京区本郷 1-28-36 鳳明ビル 1 階
電話 03-5803-4155 ／ファックス 03-5803-4156

sangensha.co.jp

ご注文は全国の書店、ネット書店、生協、または弊社まで

推薦の辞

「解説すべき社会的事件としてのセザンヌ」

セザンヌに関してこれだけ多くの著作が発表されてきた今日、セザンヌ研究はすでに出尽くしたと言えないだろうか？

永井隆則はこの問いに挑もうとする。

彼はまず、セザンヌの作品群に対する学問的アプローチの諸段階を再確認する。永井の分析によれば、最初に「実証主義」の時代があった。この時代の代表的存在はジョン・リウオルドである。まずは、セザンヌの作品および人物としての重要性を認識し、その絵画作品の場所（プロヴァンス地方、パリ地方、サヴォワ県、スイス）を特定し、その一覽を作成する必要があったのである。続いて、「フォーマリズム」の時代があった。永井隆則はここで、英米圏の研究（概括すると、フライからシフまで）を再確認していく。ここでは、セザンヌの作品そのものが分析される。つまり、作品をありのままに、すなわち「美術館の芸術のように堅固で持続性のある」絵画的形態として見ることになる。そして、第三の時代が来る。永井はそこで、セザンヌを精神的な視点から見ようとする論者たちを検討する。

こうした検証を経て、永井隆則は、セザンヌの作品はいまだに、そして常に、研究者の考察の対象から逃れている、と結論づける。例えば、アタナソグルー・カルマイヤー女史の研究は、それを決定的に裏付けるものである。二〇〇三年に刊行されたその著書（『セザンヌとプロヴァンス地方』）の副題「画家とその文化」は、これまで探索されたことのない領域を拓くものだ。それは、社会とは、必然性としてのみならず、土壌としても働くものであり、セザンヌを理解するためには、人間や芸術家を取り巻く文化や社会の中に、彼らがどれほど深く組み込まれていたのかを把握する必要があるのではないか、という問題を提起した。芸術作品は、パリとエクスとの間、伝統と近代性の間、アカデミズムと印象主義の間、等々に存する条件を養分として育つ。芸術作品は、解説すべき社会的事件となるのだ。

永井隆則の今回の仕事が、セザンヌの新たな解釈をもたらし、日本、欧州、あるいは米国で新たな研究を生み出すきっかけとなることは疑いない。同氏も所属するポール・セザンヌ協会は、この著書を推薦したい。

ドニ・クターニュ

ポール・セザンヌ協会会長

推薦の辞

「南仏プロヴァンスとの関係から読み解く包括的セザンヌ論」

永井隆則氏の新著『絵画における真実』は、セザンヌの芸術に関する他書とは一線を画す著作である。これは、あまたある既存書に新たな解釈を付け加えるといった類いのものではない。氏が生み出したのは、何十年もの研究に裏打ちされた包括的なセザンヌ論である。理論は情報を意味あるものに変える役割を果たす。本書の優れた功績は、社会の近代化とこの歴史的事象を取り巻くあらゆる問題という文脈の中でセザンヌとその芸術の意味を問い明らかにした点にあり、セザンヌがフランス社会、特に自身と重ね合わせていたプロヴァンス地方に深い関心を寄せていたことを論証している。

永井氏のセザンヌ論は、過去一世紀以上にわたる日米欧の数々のセザンヌ研究者の論文を紐解いた上で築かれたものである。氏はこうした膨大な論考を整理した結果、これまでのセザンヌ研究がそのほぼ全てが三つの記録・分析手法、すなわち、一・伝記（実証主義的方法による）、二・形式や技法の研究、三・精神分析、に限定されてきたと結論づけている。これらに続く第四となり得るのが、社会史研究であるが、まだ数は少ない。

ただし、こうした社会史研究の一つに、プロヴァンスとセザンヌの関係について論じたニーナ・マリア・アタナソグルー・カルマイヤーの著作があり、その内容は、セザンヌが地方政治に深く関わり、地方（プロヴァンス）と国（フランス）を隔てる対立に敏感な芸術家であったとする永井氏の見解と通じ合う。永井氏は、セザンヌが政治と芸術の両面で、標準化の対極にあるものとして個性や独自性を擁護するようになった、という優れた洞察を提示している。

セザンヌの技法の特殊性や近代化によるプロヴァンスの変容に対してセザンヌが抱いた失望を理解するためには、こうした標準化への反発が鍵を握る。セザンヌにとって、パリは標準化の源であるのに対し、プロヴァンスは自身の生活様式を守ろうとものがく少数民族のようなものだったのである。

本書とそこに示された理論は、セザンヌ芸術が地元の環境に根差し、彼の生き方そのものであったことを実証している。こうした生き方こそが、セザンヌの「絵画における真実」の源泉であった。そのモダニズムの形式は独自のもので、あたかもセザンヌが、死後パリや世界で繰り広げられること全てを見据えていたかのように、彼の功績に帰されてきた標準的なモダニズムではない。永井氏の歴史的視点からの分析は、セザンヌの後世代にとっての重要性を全く損なうことなく、その個性を再現して見事に描き出している。

リチャード・シフ

テキサス大学教授、オースティン、米国

「目次」

はじめに

第一部 「絵画における真実」を探求した画家の生涯と作品

第二部 創作主体としてのセザンヌ

- 第1章 書簡に表明された芸術観
- 第2章 理想郷としての女性表象
- 第3章 「仕上げ(fini)」の否定と「絵画における真実」の自覚

第三部 セザンヌの芸術環境

- 芸術家 第1章 過去の巨匠たちとの対話
- 第2章 印象派の美学とセザンヌ
- 批評家 第3章 ロダンとセザンヌの芸術的連帯
- 第4章 社会参加としてのゾラの美術批評
- 第5章 ゾラとの共同作業としての芸術観の樹立
- コクター 第6章 コレクター
- 王藝とデザイナー 第7章 アール・ヌーヴオーと生命主義思想
- 第8章 セザンヌとモダン・デザイン

第四部 セザンヌの「場所」

- 土地 第1章 パリ滞在の意味 ― 芸術と自然の弁証法
- 第2章 セザンヌのアルカディア ― プロヴァンス
- 第3章 ジャズ・ド・ブッフアンとセザンヌ絵画の原初的意味
- 第4章 セザンヌの社会史研究の可能性
- 社会 第5章 近代化社会における「感覚の実現」の意味

おわりに

あとがき

- 註
- 文献表 (Bibliography)
- 人名索引
- 事項索引
- 引用図版出典一覧

